

1. 評価報告概要表

【評価実施概要】

事業所番号	2470300456
法人名	社会福祉法人 伊勢湾福祉会
事業所名	グループホーム マリンの家
所在地 (電話番号)	鈴鹿市中旭が丘1丁目11-8 (電話) 059-387-8600
評価機関名	三重県社会福祉協議会
所在地	津市桜橋2丁目131
訪問調査日	平成 20 年 8 月 26 日(火)

【情報提供票より】 (H20年8月1日事業所記入)

(1)組織概要

開設年月日	平成 12 年 8 月 1 日		
ユニット数	1 ユニット	利用定員数計	9 人
職員数	10 人	常勤 5人, 非常勤 5人, 常勤換算 7.7人	

(2)建物概要

建物構造	鉄骨 造り		
	2 階建ての	階 ~	1 階部分

(3)利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	45,000 円	その他の経費(月額)	25,000 円~
敷 金	有(円) 無		
保証金の有無 (入居一時金含む)	有(円)	有りの場合 償却の有無	有 / 無
食材料費	朝食	円	昼食 円
	夕食	円	おやつ 円
	または1日当たり 1,300円		

(4)利用者の概要(8 月 1 日現在)

利用者人数	9 名	男性 1 名	女性 8 名
要介護1	名	要介護2	4 名
要介護3	4 名	要介護4	1 名
要介護5	名	要支援2	名
年齢	平均 87.6 歳	最低 82 歳	最高 92 歳

(5)協力医療機関

協力医療機関名	西城外科内科
---------	--------

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

この地区で最初のグループホームで、海の近くの「海の家」を改造して作られたグループホームで歴史は古い。3年前同じ市内の新興住宅地内に建て替えて現在に至っている。事業所の前には市の幹線道路が走っており車の通行量も多い。利用者の買い物や外出(時には徘徊)など、安全のために職員は細心の注意を払ったケアを行っている。

【重点項目への取り組み状況】

重点項目①	<p>前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4)</p> <p>前回評価では、1地域自治会への加入、2重度化終末期の事業所としての方針、3入浴回数増加と希望時間帯の入浴支援、4災害時の地域からの応援体制の構築、の4項目であった。取り組みはしているが具体的な改善には至っていない。今回も引き続き改善課題となった。</p> <p>今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)</p> <p>自己評価は職員からアンケート等で意見を聞き管理者が作成している。外部評価は全員が読むように周知している。</p>
	<p>運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6)</p> <p>会議は2ヶ月に1回定期的に開催されている。この中で出された意見として、利用者の散歩を小学生の下校時に合わせて「防犯パトロールにしては」と提案があった。地域交流の一環としてこの事案を前向きに取ることを運営推進会議で確認している。</p>
重点項目②	<p>家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8)</p> <p>家族会で意見(不安)が出されている。「当事業所は歴史が古く利用者の高齢化が進んでおり、重度化の場合の医療上の対応に不安がある」とこうした家族の不安に対して事業所としてその対応を迫られている。</p>
重点項目③	<p>日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)</p> <p>近くの商店、事業所前のパン屋さんには買い物に出ている。近くの公園へ散歩に出ると地域の人たちの散歩コースでもあり気軽に挨拶をしていただき交流している。地域ボランティア、宗教団体の清掃奉仕活動の受け入れ、保育園児との交流もある。自治会加入は利用者家族の反対意見が約半数あり未加入のまま推移している。</p>

2. 評価報告書

(部分は重点項目です)

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
I. 理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	「個人の尊厳、地域でのその人らしい生活、信頼・安心して利用できる地域に根付いた福祉活動」が、この事業所の理念である。鈴鹿地区で最初のグループホームであり、開設当初から「地域の中で」という考え方を持って運営している。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	月1回の職員ミーティング、職員カンファレンス、2ヶ月に1回の家族会等で折に触れ理念について話し合っている。		
2. 地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	地域ボランティア、宗教団体の清掃奉仕活動の受け入れ、保育園児との交流等行っている。自治会への加入は前回評価の改善課題であるが、利用者の家族で自治会加入への反対意見が約半数あり、未加入のまま推移している。	○	自治会への加入は地域住民の一員として当然のことであり、運営推進会議への自治会長の参画、災害時の地域からの応援等にも関係がある。今後利用者家族と話し合いを行い、自治会に加入して地域活動に参加すること、自治会長との連携を強めていくことが望まれる。
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	自己評価は職員からアンケートで意見を聞き、管理者が作成している。外部評価は全員が読むように周知している。前年度評価の改善課題は4項目あり、具体的な改善には至っていないので、引き続き改善課題として取り組んでいる。		
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議は2ヶ月に1回定期的に行われている。この中で出された意見として、利用者の散歩を小学生の下校時にあわせて「防犯パトロールにしては」と提案があった。家族の意見も聞き、反対意見のある人は除いて可能な利用者で始めようと前向きに取り組んでいる。	○	会議への自治会長の参画は前回評価の改善課題でもあり、自治会への加入と合わせて取り組まれることを期待する。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	認知症介護予防教室の開催を市から依頼され、年間6回事業所内で開くことになっている。したがって市の担当者とは連携を取り合うことが多い。介護相談員は月1回定期的に来所していただいている。		
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	家族の面会時には毎日の記録を見ていただいている。「おたより」「お知らせ」(顔写真は載せない)を月1回発行、送付している。顔写真入りの広報は家族から「やめてほしい」といわれている。利用者全員現金を預かっており、出納帳に家族の確認印をもらっている。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議に家族代表が参加しており意見を聴く機会がある。家族会は事業所内で開かれるので家族、管理者、職員全員、利用者全員が参加している。事業所は歴史が古く利用者の高齢化が進んでいるので、重度化による医療面の不安を家族から出されている。事業所はその対応を迫られている。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	法人内での管理者の異動はあったが就業前に挨拶に訪れ顔を知ってもらい混乱はなかった。新人の就職があったが経験もあり、本人の手柄もよく利用者によく馴染めてダメージはない。		
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内の研修が月1回あり、交代で勤務中に参加している。事業所としての研修計画はなく研修は実施していない。離職者もあり勤務の状況から月1回のミーティングが精一杯である。書籍を準備し自己学習を勧めている。	○	職員の育成は、事業所の介護サービスの質の向上に繋がるため、各職員の状況に応じた段階的・計画的な勉強の機会を作られることが望まれる。
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	県グループホーム連絡協議会があるが、当事業所は加入していない。今後の加入に向けて検討している。	○	同業者とのネットワークづくりや勉強会など、交流や連携を行うことは事業所の質を高める上で大切である。今後協議会加入にむけ努力されることを期待する。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	入居前には面談を行っている。デイサービス、ショートステイからの利用者は利用時の情報を把握して、うまく馴染めるよう工夫している。		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	家庭的な雰囲気が作れるよう心がけている。職員は、利用者を「人生の大先輩」として接している。「家族の大切さ」などを教えてもらったりしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居時に「これから何をしたいか」を聞くことにしている。利用者に暮らし方の希望を聞くと「ゆっくり、のんびりしたい」が多く、外出希望等があればすぐ計画に反映している。		
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	家族との「連絡帳」から意見や要望を、生活記録から利用者の情報を介護計画に反映している。計画は、1ヶ月に1回のミーティング(カンファレンス含)や随時行うミニカンファレンスで作成している。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	3ヶ月に1度の見直しを原則としているが、状態の急変時には随時見直しを行っている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
3. 多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々々の要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	特別な外出希望や通院等は家族の付き添いが原則となっているが、家族の都合により職員が付き添っている。		
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居後は本人のかかりつけ医の紹介状で事業所の協力医に切り替えている。協力医は法人の契約で現事業所からは遠く緊急時には対応が困難である。1ヶ月に1回は受診しており1週間に1度は往診がある。利用者と家族は本人のかかりつけ医を希望している。	○	事業所が3年前に現在地に移転した関係もあり協力医院が遠くなった。緊急時の対応を考えると検討の必要がある。本人・家族等がかかりつけ医を希望しており、受診できるよう支援されることが望まれる。
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	重度化や終末期のあり方について事業所としての方針はない。重度化した場合は協力医に連絡、救急車で他の施設か病院へ搬送している。新しい入居者の家族には「重度化に備え事前に施設への申し込みをしておいてほしい」と話している。	○	本人と家族の大きな関心と不安のひとつは、重度化した場合の対応のあり方である。協力医は事業所から遠く、緊急時即来所は困難であり、重度化や終末期のあり方について事業所としての対応方針の共有を図られることが望まれる。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
1. その人らしい暮らしの支援					
(1)一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	職員の言葉かけに利用者から指摘されることがあり、プライバシーを傷つける言葉かけには気をつけるように周知している。個人情報の取り扱いには注意している。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的な日課は決められているが、利用者のその日の状況で希望に沿うように暮らしている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
		○食事を楽しむことのできる支援			
22	54	食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	献立は管理栄養士が行い、委託業者が法人の厨房で調理して事業所に配達している。職員3名は同じ食卓を囲んで食事介助をしながら昼食を摂っている。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	入浴は週2回である。入浴時の要介護度が高く、入浴時間を午前と午後に分けている。10:00～11:30に3名程度入浴、他の人は14:00～15:30としている。入浴日以外は足浴を実施している。	○	入浴は、利用者の生活習慣や希望に多様性があり、それを活かすことが、本人や家族の安心と満足に繋がる。現状は週2回が定着しているが、希望する日、時間に入浴できるのが理想であり、様々な工夫(職員ローテーション等)で入浴日を増やすなどの取り組みを期待する。
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
		○役割、楽しみごと、気晴らしの支援			
24	59	張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	月ごとの行事の企画担当職員を決め(例えば、お誕生会や七夕祭り等)楽しみごとをつくっている。気晴らしには外出が最も多い。食事時のテーブル準備、後片付け、食器拭きなどを手伝ってもらっている。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	利用者に外出の希望を聞くと「出たくない」という人が多いので、誘って出かけるようにしている。季節により近くへの散歩や外気浴に出かけている。事業所の前のパン屋さんへ全員のパンを買いに行ったりしている。		
(4) 安心と安全を支える支援					
		○鍵をかけないケアの実践			
26	66	運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	デイサービスを併設して建物全体の玄関は開錠しているが、事業所の入り口は鍵が掛けられている。	○	鍵を掛けられた状態での暮らしは利用者に「閉塞感」「心理的不安」をもたらす。職員はその異常性に気付く意識改革が必要である。終日の開錠を目標としつつも当面は時間開錠、見守りケアを習熟することが「意識を変えること」に繋がると思われる。その取り組みを期待する。
		○災害対策			
27	71	火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	9月には夜間想定避難訓練を実施する予定になっており、防災マニュアルを小冊子にして全職員に配布、周知を図っている。	○	緊急時、職員だけの誘導には限界がある。日ごろより地域住民との協力関係を築いていくことが望まれる。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(5)その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	法人本部の管理栄養士により献立と栄養管理を行っている。事業所では個々の利用者の嚥下・咀嚼力に合わせた盛り付けを行っている。食事摂取量、水分量は業務日誌に記録している。水分補給は10時と15時に行っている。		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1)居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	食堂兼リビングは、明るく広々として快適である。交通量の多い道路が事業所の前を走っているが不快な騒音もなく静かである。壁面には利用者と職員で作った季節感を取り入れた手作りのカレンダーが掛けてあり、落ち着いた雰囲気醸し出している。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は自分で持ち込んだベッドが中心であるが、希望により和室もある。整理ダンス、置き棚、テレビ、日用品等好みのものを持ち込み、居心地よく過ごせるように工夫している。		